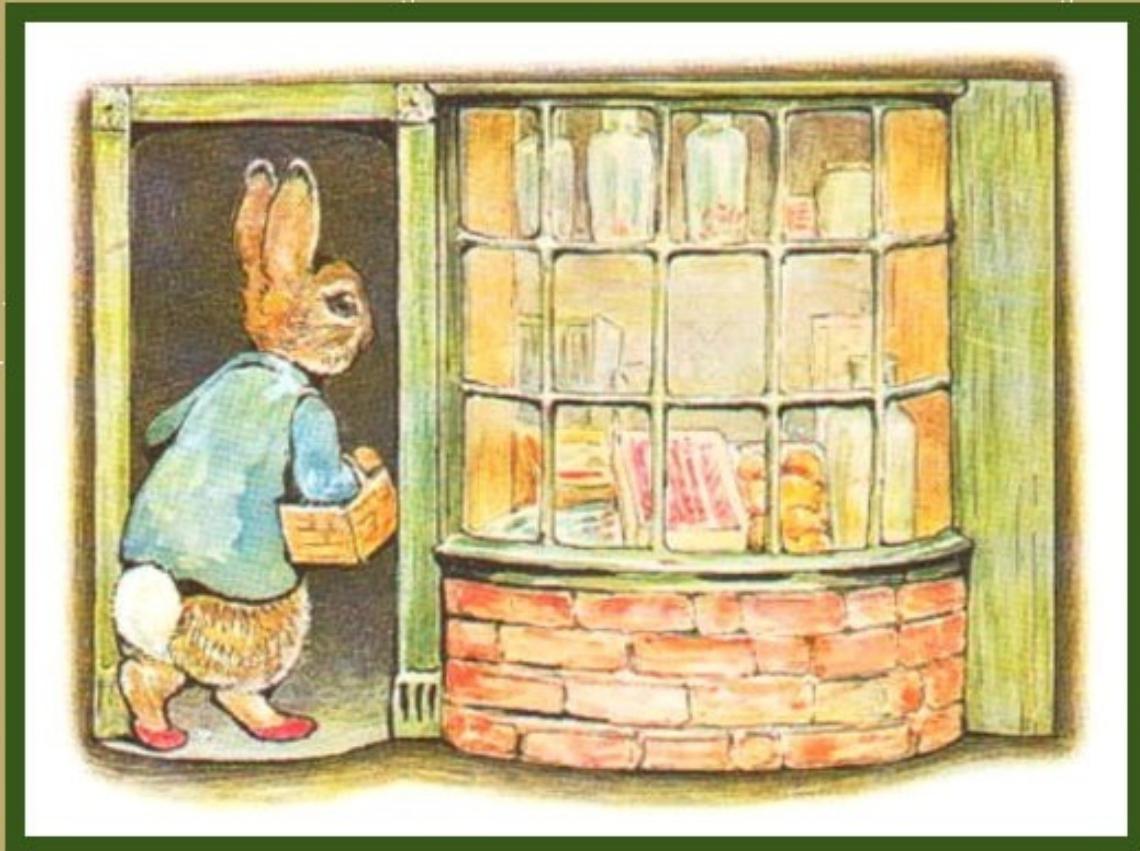


# ジンジャーとピクルズの話



ビアトリクス・ポター さく・え  
たちばな こうじ やく

「ヤマネでも結構でさあ！」  
(三年寝たきりで愚痴ひとつこぼさず！)  
そうのたもうたジョン・テイラーじいさまに  
心からの敬意とともに捧ぐ



## ジンジャーとピクルズの話



むかしむかしある村に、一軒の雑貨屋があった。ショーウィンドウのうえに書かれた店名は『ジンジャーとピクルズの店』。

ちっちゃなかわいいお店で、人形にぴったりサイズ——ルシンダとコック人形のジェーンは、食料や日用品を、いつもジンジャーとピクルズの店で買ってたんだ。



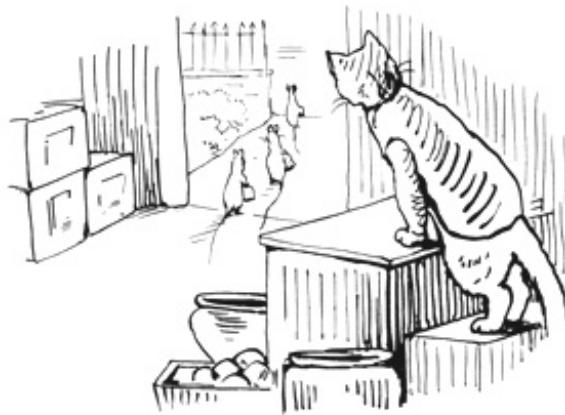
中のカウンターは、うさぎにちょうどいいくらいの高さ。ジンジャーとピクルズの店では、赤い水玉もようのハンカチを、1ペニーと3ファービングで売ってたよ。

砂糖や、かぎタバコや、雨ぐつもあった。

そればかりか、とても小さい店だったにもかかわらず、ほとんど何でも売っていたんだ——あわてて必要になるもの以外ならね——たとえば靴ひもとか、ヘアピンとか、羊の骨つき肉だとか。

ジンジャーとピクルズってのは、お店をひらいている人たちのことさ。ジンジャーは黄色い牡猫で、ピクルズはテリア犬だった。

うさぎたちは、どうしてもピクルズがちょっとばかりこわかった。(※テリアは兎を狩る獵犬)



お店の常連にはハツカネズミたちもいたんだが——こっちはジンジャーにいたくおびえてた。

ジンジャーの方でも、ねずみたちの相手はいつもピクルズにおまかせさ。なぜって、よだれが出そうになるんだと。

「辛抱できひんのや」と言うんだよ。「あん人らがちんまい荷物しょって、戸口から出でいかはるの見とおと」



「あっしもクマネズミにはおんなじ気持ちにならあ」と、ピクルズが答えた。(※俗にハツカネズミ(mouse)は猫が、クマネズミ(rat)は犬が追うとされる)

「だが店に来た客を食うなんざあっちゃあならねえぜ。みんなうちをみかぎって、タビサ・トイッヂの店に行っちまう」

「そらどうでっしゃろ、どこも行けんようならはるんちゃうか」ジンジャーは陰気に返事した。  
(タビサ・トイッチトは、村でもう一軒だけの店をひらいていて、そこではツケがきかなかった)

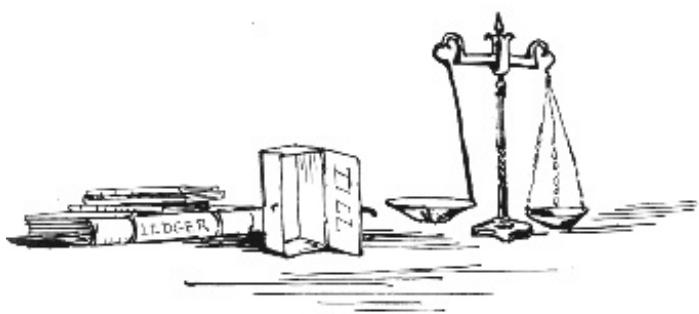


ジンジャーとピクルズの店では、いくらでもツケで買い物ができた。

『ツケ』ってのはこうだ—— お客様が石けんをひとつ買うとき、財布をだしてお金をはらう代わりにこう言うのさ、「おかんじょうはまたこんどのときに」。

するとピクルズはていねいに頭を下げてこう言う、「承知しやした、おかみさん」。そして、それを帳面につけておくんだ。

お客様は次から次へとやってきて、たくさん買い物をしていった。ジンジャーとピクルズをこわがりながらも。



でも、いわゆる「レジ」には、びた一文入っちゃこないんだ。



お客様は連日つめかけて、おおにぎわいのだいはんじょう、特にタフィーをほしがる客がいっぱいいた。だけどいつだって現金のやりとりはいっさいなし。ハッカ飴の1ペニーぱっちでさえ、誰もはらおうとしないのさ。

ただ、売上成績はたいしたもので、タビサ・トイッチトの店の十倍はあった。



お金がちっともないもんだから、ジンジャーとピクルズは店の売り物に手をつけざるをえなかった。ピクルズはビスケットを食べ、ジンジャーはタラの干物を食べた。  
お店を閉めたあと、ろうそくのあかりの下での食事だった。



1月1日になっても素寒貧はあいかわらずで、ピクルズは犬の鑑札を買うこともできなかった。  
「けたくそ悪くてかなわねえ、おまわりにびくつくなんて」とピクルズ。  
「あんさん、テリア獵犬なんぞに生まれはるからあきまへんわ。あて猫は鑑札やらいらしまへんし、牧羊犬のケ  
ップはんかて必要おまへんちゅうの」



「まったく落ち着かねえ、呼び出しきらうのが心配でたまんねえや。ツケで鑑札くれねえかって、郵便局まで無駄足ふんじまつた」ピクルズは言った。

「あすこらにやおまわりがわんさといるぜ。帰りしなにひとり出っくわしちまつたよ。

もういっぺん、クマネズミのサミュエル・ウィスカーズに勘定書きを送ってみようじゃねえか、ジンジャー、あいつあベーコンのツケが22シリング9ペンスもありやがんだ」

「あら払う気ちいともないのんちゃうん」とジンジャーは答えた。



「それと、あっしの見たとこ、アナ・マリアは万引きしてるにちげえねえ—— クリームクラッカーがそっくり消えちまってんだぜ？」

「あんさん、じぶんで食べなはったんやろ」とジンジャーは返した。

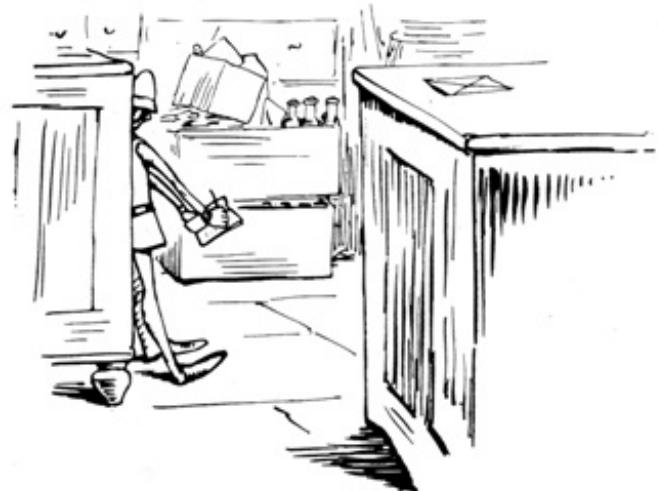


ジンジャーとピクルズは店の奥にひっこんで、売上を計算した。金額をどんどんどんどん足し合わせていく。

「サミュエル・ウィスカーズの野郎、しっぽの長さくれえのツケをためてやがる。10月からこっち、かぎタバコを1と4分の3オンスも持ってっちまってらあ。

「7ポンドのバター3分の1、封蝋1本、マッチ4本、しめていくらでえ？」

「勘定書きそっくり、もういっぺんみんなに送りつけたりまひよ。『謹呈』ちゅうて」と、ジンジャーは答えた。



しばらくすると、店の方で物音が聞こえた。何かがドアを押して入ってきたようだ。  
二人が奥から出していくと、カウンターの上に封筒が置いてあった。そして警官がひとり、手帳に何事か書きつけていたんだ！



ピクルズはひきつけを起こしかけ、やたらに吠えて吠えかかった。

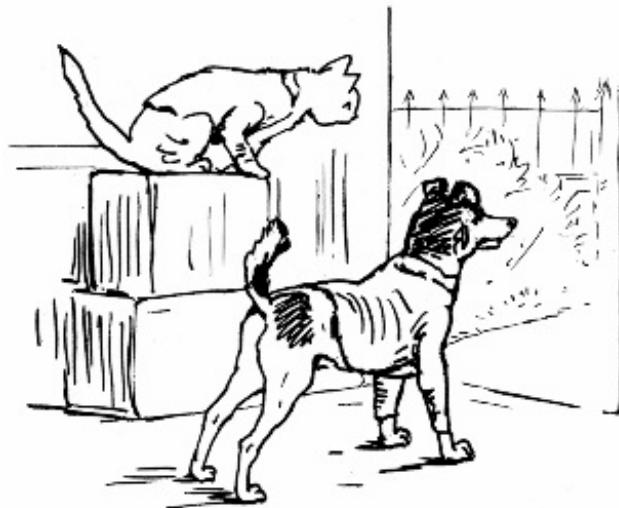
「食いついてまえ、ピクルズ、食いついてまうんや！」

ジンジャーが砂糖樽のうしろから唾を飛ばしてわめいた。

「そんなんただのドイツ人形や！」

警官は、手帳に書きつけを続けた。二度ほど鉛筆を口にくわえ、一度はそれを糖蜜にひたした。

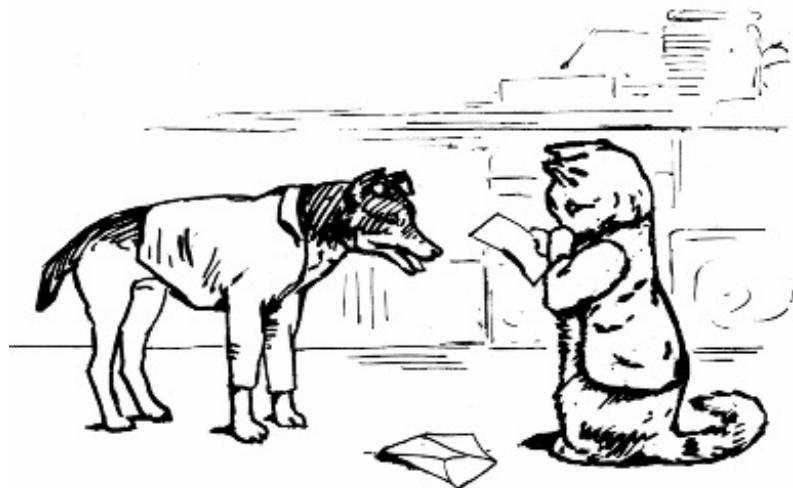
ピクルズが声がかかるほど吠えたてても、一顧だにしやしない。警官の目はガラス玉で、ヘルメットは糸で縫いつけられていた。



とうとうしまいに飛びつこうとしたピクルズがふと気づくと——店の中には誰もいなくなっていた。

警官はどこかに行っちゃったんだ。

でも封筒は残ってた。



「どう思う、あいつ本物のおまわりを連れにいったんじゃねえか？ そいつは呼び出し状かい」 ピクルズがたずねた。

「ちやう」と、封筒を開いたジンジャーが答えた。

「こら地方と国の税金の通知書や。3ポンド 19シリング 2ペニスと3ファージングやて」



「もう我慢ならねえ」 ピクルズは言った。 「店たたんじまおう」  
二匹はよろい戸をおろし、店をやめて出て行った。とはいえ、その辺りからいなくなってしまったわけじゃなかったんだ。実際、もっと遠くへ行っちまえばいいのにと思ったひとたちもいたくらいでね。



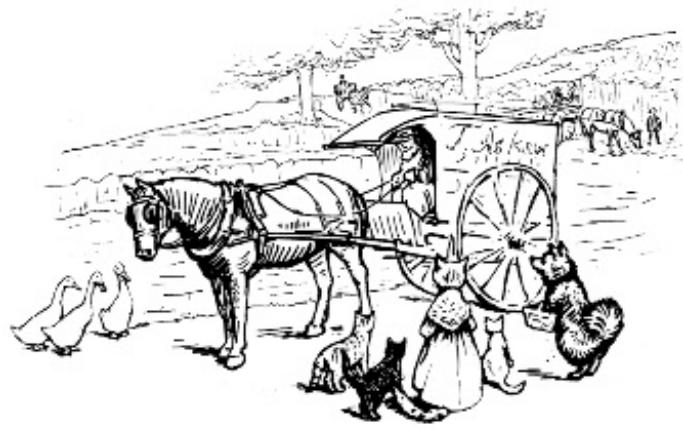
ジンジャーは、うさぎたちの巣穴の近くで暮らしてゐる。何をしてゐるやら知らないけど、でっぷり太って、居心地がよさそうだ。



ピクルズは、今は狩場の番犬さ。



ジンジャーとピクルズが閉店したことで、たいそう不便になった。タビサ・トイッチトは、すぐさま全部の品物を半ペニー値上げしたうえ、あいかわらずツケを受けてくれなかつたんだ。



もちろん、行商の馬車は來た—— 肉屋に魚屋、それにパン屋のティモシーも。

けど誰だって“種入り焼き菓子”や、スポンジケーキや、バタつきパンだけじゃ生きていかれないものさ—— たとえそれがティモシーのくらいおいしいスポンジケーキだろうと！



しばらくすると、ヤマネのジョン父娘が、ハッカ飴とろうそくを売りはじめた。

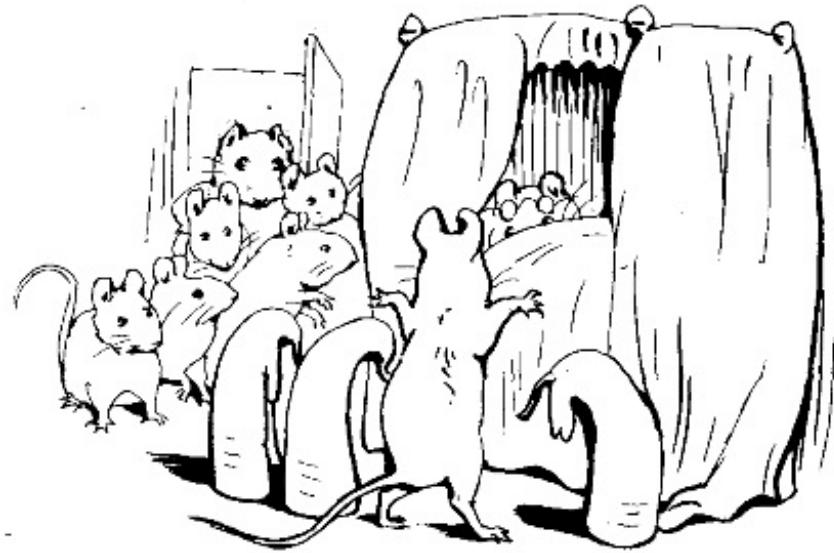
セルフフィッティング シクスイズ  
でも、あつかっていたのは“どんなろうそく立てにも合う・六本入り”じゃなかつたし、7インチのろうそくは、一本はこぶのにねずみ五匹がかりだった。



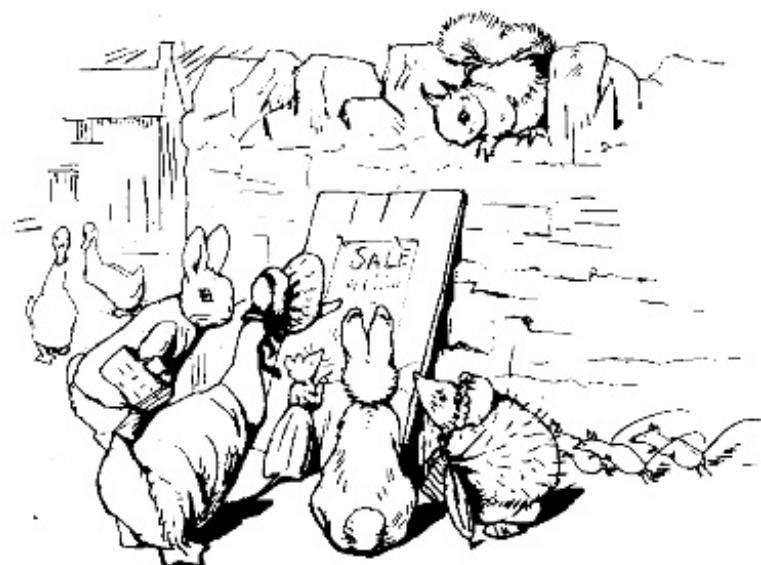
おまけに——その店で売るろうそくは、陽気がいいととてもおかしなことになっちゃうんだ。



なのにヤマネ嬢ときたら、燃えさしを持っていって苦情をうったえても、返金に応じようとしないのさ。



それにヤマネのジョンは、文句をいわれてもベッドに寝たきりで、「じつにけっこう」と言うだけなんだ。こんなのって店の経営者のとる態度じゃないよ。



それで、サリー・ヘニー・ペニーがお店を新装開店するというチラシを刷ってはりだしたところ、みんなが喜んだのさ——『ヘニー開店大売出し！掘り出し物多数！ペニー大安売り！よってらっしゃいみてらっしゃい！』

このチラシにはたまんなくうずうずさせられた。



開店の日は大混雑だった。店のなかはお客様でぎゅうぎゅう、ビスケット缶のうえにはねずみがぞろぞろ。

サリー・ヘニーペニーは、おつりをかんじょうするのにてんてこまい。それでも、支払いは現金でとゆづらないんだ。本当は気のいいめんどりなんだけどね。



それに彼女、特売品をおどろくほどいろいろと仕入れていたんだ。

そこには誰でも、何かしら気にいるものがあったのさ。

### おしまい

※ジョン・テイラー老人は、ポターが住んでいた村の鍛冶屋。

彼の奥さんが営んでいた雑貨屋がジンジャーとピクルズの店のモデル。

作品に登場できるならヤマネでもかまわないと言ったという。

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[りすのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggy-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【[パイと焼き型の話](#) : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906)
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎ物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907) 【[子ねこのトムの話](#) : 執筆中】
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)  
【[サミュエル・ウィスカーズの話](#) あるいは、[うずまきプディング](#) : 2013.4】 **NEW**
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシーワンダーハウスの話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913) 【[ピグリン・ブランドの話](#) : 執筆中】
20. Appley Dapply's Nursery Rhymes (1917) 【[アッブリー・ダブリィの童謡](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの童謡](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930)

原文参照 [Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

## ジンジャーとピクルズの話

<http://p.booklog.jp/book/64036>

作者：ビアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ビアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64036>

ブログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64036>

電子書籍プラットフォーム：ブログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブログ